

## 淡路地域のタマネギ圃場におけるネギアザミウマ発生推移

淡路地域の中生種・極早生種のタマネギ圃場において、ネギアザミウマ及びアイリス黄斑ウイルス（以下、IYSV）保毒虫の発生調査を行ったところ、極早生種の圃場では定植直後から発生が認められ、春先における中生種圃場への飛来源になっている可能性が示唆された。

### 内容

2020年5月、淡路地域においてIYSVによるタマネギえそ条斑病が多発生した。IYSVはネギアザミウマによって媒介されるため、本病を防ぐには、ネギアザミウマの発生実態に応じた防除対策を講じる必要がある。しかし、近年同地域で作付けが増加している極早生種も含めて、タマネギの各作型におけるネギアザミウマの発生実態は不明であった。そこで、中生種及び極早生種のタマネギ圃場においてネギアザミウマ及びIYSV保毒虫の発生推移を調査した。

中生種の圃場では、12月上旬の定植から3月上旬までネギアザミウマ成虫の発生は認められず、幼虫の初発生は3月下旬であった（図1）。その後、4月に密度が急増し、茎葉が倒伏する直前（5月中旬）に最も高くなった。

一方、極早生種の圃場では、定植から2週間経った11月上旬から成虫の発生が認められ、12月上旬には幼虫の発生も認められた（図1）。そ

の後、厳冬期にも密度が維持され、3月中旬以降に再び増加した。

また、中生種の圃場では4月になるまでIYSVの保毒虫が認められなかった一方、極早生種の圃場では、11月中旬から4月の収穫期に至るまで、継続的に保毒虫が認められた（図2）。以上のことから、極早生種は栽培期間を通してネギアザミウマの増殖及びIYSV保毒虫の生息に好適な環境となっており、春先にはその収穫に伴って、周辺の中生種圃場へ分散している可能性が示唆された。

### 今後の方針

本結果及び薬剤感受性検定で得られた知見（本誌2021年11月号参照）をもとに、効率的・効果的な薬剤防除体系を構築し、関係機関と連携しながら現地普及を図っていく。

富原 工弥（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

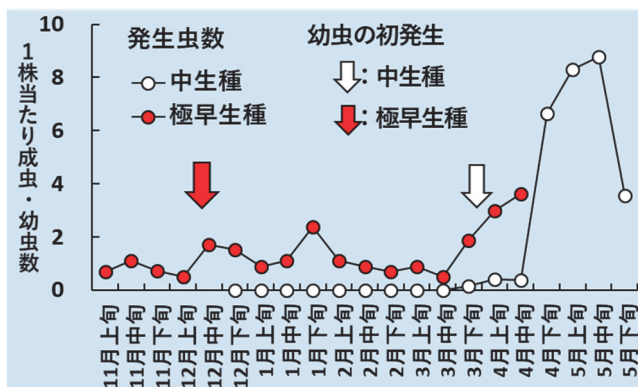


図1 タマネギの作型ごとのネギアザミウマの発生推移の比較（淡路地域、3か年平均）

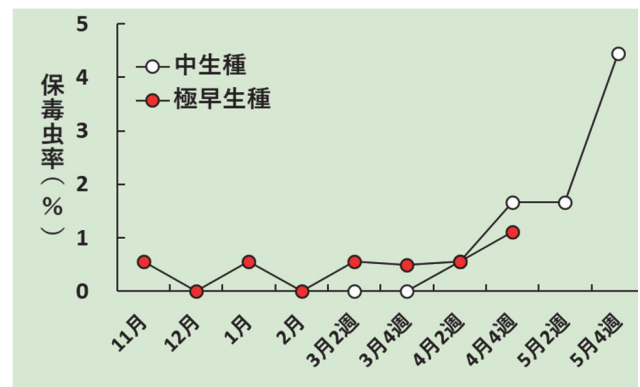


図2 タマネギの作型ごとのIYSV保毒虫率の推移（淡路地域、3圃場・2か年平均）